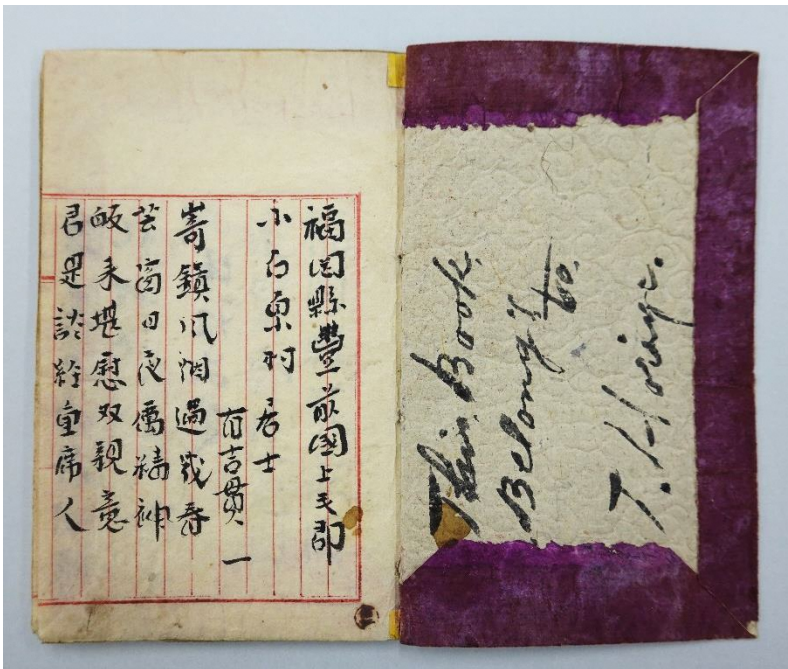


□惜別のサイン帳



平成30年(2018)春、長崎歴史文化博物館(長崎市立山1丁目)に「堀江豊次郎 惜別のサイン帳」と題する1冊のノートが寄贈され、新たに収蔵されました(県書11K3242)。寄贈者は東京都町田市在住の堀江千周氏で、元々このノートを所有していた堀江豊次郎のご子孫です。

このサイン帳のサイズは縦19.5cm、横13.5cmで、54ページからなります。表紙には傷みなども見られますが、保存状態は概ね良好で、豊次郎とそのご子孫がこのサイン帳を大事に保存されていたことがよくわかります。サイン帳に寄せ書きをしているのはのべ35

人で、なかには2回書いている方も数名見受けられます。ノートをひらくと、達筆な文字で書かれた惜別の言葉が目飛び込んできます。

どうしてこのサイン帳(寄せ書き)が長崎の博物館に収められることになったのでしょうか。これには約1年半という短い間でしたが、豊次郎の人生が長崎と交差していたことに関係してくるのです。

□堀江豊次郎について

堀江豊次郎は明治2年(1869)、富山県富山市に生まれました。その後地元の学校を経て明治20年(1887)長崎の東山手地区に創設された加伯利(カブリー)英和学校に入学します。なぜ富山から長崎へ留学したのかという疑問に対しては、豊次郎の孫にあたる寄贈者の堀江千周氏は、「その後養父となる叔父の太平が売薬業をしながら全国を旅するなかで、当時医学への道を進もうとしていた豊次郎のため長崎の先進的な教育に注目したのではないかと推測されています。

入学から1年経った明治21年(1888)のこと、太平は親戚より受け継いだ酒造業を拡大するため豊次郎を呼び戻すことを決め、その11月豊次郎は志半ばで長崎を去ることになりました。その別れの際に机を並べた学友や、交流があった近隣のミッションスクールに在学する友人らが別れの言葉を寄せたのが、この「惜別のサイン帳」なのです。



長崎遊学前の豊次郎(17歳)

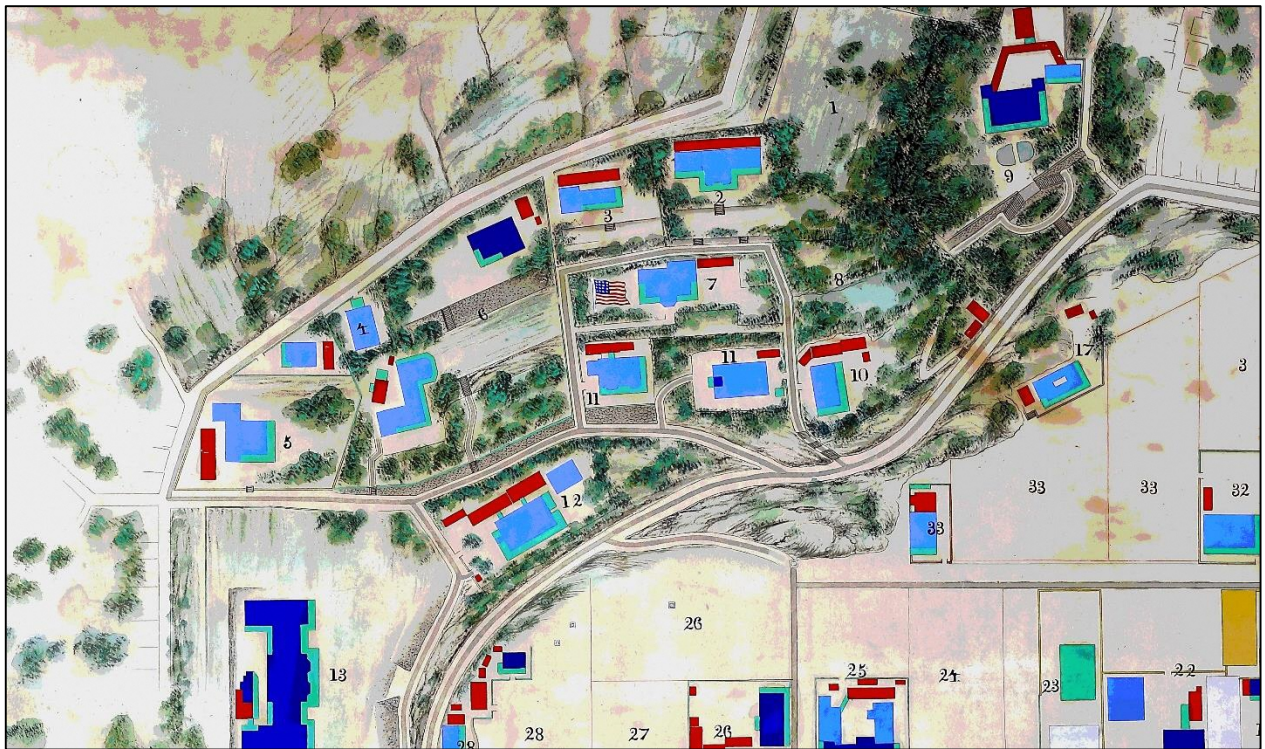
口加伯利（カブリー）英和学校と東山手居留地のミッションスクール



明治40年代の鎮西学院



スチール・アカデミー（東山学院）校舎



明治10年代の東山手居留地図（部分） 長崎歴史文化博物館蔵

13番に活水学院 6番に加伯利英和学校 9番にスチール・アカデミー（東山学院）が創設される

豊次郎が入学した加伯利（カブリー）英和学校は、明治14年（1881）アメリカのプロテスタント系のメソジスト監督教会から派遣されたロング（Carroll Summerfield Long 1850～90）によって長崎の東山手居留地に創設されました。校名はロングがアメリカを出発する前に2ドルを寄付したカブリー夫人にちなんで命名されたそうで、トーマス・グラバーの息子である倉場富三郎もここで学んでいます。豊次郎が長崎を去ったのち、明治22年（1889）に鎮西学館と改称し現在の鎮西学院（後に諫早市に移転）にその歴史は受け継がれます。

当時、東山手居留地には加伯利英和学校のほかにも明治12年（1879）活水女学校の創立を皮切りに

ミッション系の学校が次々に創設されており、豊次郎のサイン帳のなかにも登場するスチール・アカデミー（東山学院）も明治15年（1882）にスタウト牧師（Henry Stout 1838～1912）によって創設されました。学院は昭和7年（1932）に東京の明治学院に吸収され、長崎での歴史を閉じることになりましたが、その校舎は現在グラバー園内に移築されており当時を偲ぶことができます。またスタウト夫人が開いた女子塾は「スー・ジェス・セナリー（梅香崎女学校）」と改称した後、大正3年（1914）に下関の光城女学院と合併・移転し「梅光女学校（現在の梅光学院大学）」が誕生するまで長崎に存在しました。



梅香崎女学校

豊次郎のサイン帳には、次に紹介する尼子東八郎氏を含めてスチール・アカデミーに在学中と思われる3名の生徒が寄せ書きをおこなっているのを見ることができます。今回、スチール・アカデミー（東山学院）関係の資料を収蔵している明治学院歴史資料館（東京都）のご協力を得て、卒業生名簿の中から当時の在籍を確認したところ、3名のうち1名のお名前を確認することができました。今回は残念ながら残る2名のお名前は確認できませんでしたが、明治学院にはスチール・アカデミーに関する資料が未整理の状態に収蔵されているものもあるそうです。今後調査が進むと、その方々のお名前も発見できる可能性もあるのではないかと思います。

長崎県文化振興課 橋本 正信



東山手居留地（明治30年ころ）

長崎歴史文化博物館蔵